

海と日本の歴史的文化的考察

—— 地勢から見た国民性と生活様態 ——

宮 坂 万喜弘*

1. はじめに

情報一元化の時代になって、世界は益々緊密に結びついていく。こうした中で私達は自分自身がどこから来たか、わたしたちの住む国がいかなる国で、他の国とどう違い、同じ部分はどこか知っておきたいと思う。そして地上のどこの地域においても共同体社会が成立するには、まずそこに住んでいる人と周りの自然環境とのかかわりが大切な基礎となる。とはいえ現代のすべての人々の共通の望みは、あえて言うならばよりよい暮らしであろう。つまりまだ開発途上の国に住む人にとっては生活水準の上昇であろうし、先進国においては今の水準を将来に向けて維持するための努力の必要性であろう。しかし後者のように高い生活水準をすでに達成している国はわずかであるばかりか、そこにも社会問題が生じている。高度の機械産業の生み出す従来の人間労働力の過剰問題、高度情報産業の成果が実現したスピード社会の現実と、地球規模の伝達網の利便さが時間を意識せぬ一元化をもたらし、その結果古くからの生活感覚や価値判断を覆す変化を引き起こしているなどのことである。機械生産の生み出す大量の消費物資をどのように分配するかから、資源の枯渇の問題、消費の結果の廃棄物処理の問題、人口爆発や食糧問題、環境破壊など、生活水準をめぐる世界の諸事情の問題、どれをとっても地域性に結びついて

生活してきた国々の抱える問題は一樣ではありえない。

ところで今の EU 社会には 25 カ国の地域がある。今年 2004 年の 6 月 1 日からこの国々がひとつの EU 共同体になった。ここでは昔各国が使用していた通貨は、ユーロによって統一された。EU 国内には以前のような国境もないし関税もない。しかし日本同様若者人口の減少と高齢化が進み続け、現在の 25 カ国の EU 人口は 4 億 5 千万人である。2050 年には 5 千万人減少し 4 億人となると言われる。人口が減少する経済は当然縮小されるであろう。しかし昨年一昨年とベルギーにおける医療と高齢者社会の状況を視察してきて、ヨーロッパの人々の心に共通な意識として、一見すれば“文化の退歩的状況”をも視野にした経済重視の物質文化への挑戦のようなものが感じられた。つまりこれからの EU では、アメリカ型の市場原理や経済成長至上主義を最優先するのではなく、弱者に配慮した安定と相互に結束力を強くした社会を実現していく方向をとろうとしているのではないかという思いが強くなったのである。そのためには、確かに生活のレベルは下がるかもしれない。しかしそうしてでも弱い立場にある社会に属するひとたちの生活レベルを上げることが、社会の安定と調和のためには必要なだと国を挙げて考えているように思えた。これは無理な経済成長は目指さないで高齢者と弱者の保護に重点を置き、地味でも全員参加の調和の取れた社会の実現を考えていくということだと思われる。良くも悪くも世界に先駆けて民主主義的政治制度を生み出した先進国ヨーロッパの民衆の公共組織運営に寄

2004 年 11 月 29 日受付

* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授 西洋哲学、比較思想、倫理学

せる意識の表現と歴史的な重み、そしてその実例を私はベルギーの高齢者に対する社会福祉の実情から感じた。そこには高齢者が尊厳のある独立した生活を営む権利を持つことを尊重し、そうした生き方が最後までできるように家族を始め、社会全体が支援する低成長高福祉実現社会の姿があった。また若者達が今は就職がないにもかかわらず、これからも自分達の社会を築くのだと受け止めて、将来に向かおうとする姿に、わが国の若者の、悲壮感と対照的なものがあるように思う。

この若者の心の意識の相違点は何かと考えたとき、文化の違いは和辻の言う気候風土・地勢の違いと、そこに生じ今日まできた歴史や伝統との関係があるのではないかと思った。

いったいこれほどに豊かさを謳歌することの出来る今の社会に住むことが出来るようになったのは何によってなのか。その原因を歴史の成り立ちから考えてみたい。

2. 日本列島の成り立ち

およそ20万年前ころ地球規模での日本列島の形成状況から、日本列島がユーラシア大陸と陸続きであったことは、マンモス・大角鹿・ナウマン象など大型動物の化石や恐竜の化石の出土で分かっている。

そして人類がこの世に現れたのは地質学上第4紀の洪積世の時期であった。およそ60万年前から1万年ぐらい前までの長い期間のことである。この時期は地球生成活動において4度の氷河が地上を覆っていた時期、洪積世の前半の時期である。ジャワの直立猿人や中国の北京原人が第1, 2期氷河期の間ころ住んでいた。この時期の人類の最大の特徴は「道具を作ること」であったといわれる。このときの人類の残したものが原始的な打製石器として残され、考古学上旧石器時代と言われる。

日本列島に人の痕跡が残されるのはおよそ2~3万年前のことであった。地球の広い範囲が氷におおわれ、海面は今より100メートルも下にあった。日本列島も現在とは大きく違い、対馬海峡は川のような細さで大陸に接近し、瀬戸内海も

干上がり、西は朝鮮半島、北の北海道もサハリンとつながっていたという。

2003年の春NHK番組で“日本人はどこから来たか”の放送で、日本と古代から関係があったと思われる地域の人々の遺伝子鑑定が行われ、この鑑定で同じ遺伝子を持つ世界各地の人々との比較調査がされた。私達の祖先となる人々は北からあるいは南からやってきたことがわかってきた。そしてこれまでの何万年の日本の地理的、歴史的、文化的、人類学的、考古学的、研究の成果がコンピュータグラフィックにより総合的に再現された。

人類のアフリカ発生と旧石器人の足跡が解説されて、人口増加と気候変動の中で中近東を経てヨーロッパに向かったグループがあった。またアジアに向かいシベリアからベーリング海を渡りアメリカ大陸に渡っていったグループとインドを経て東南アジアに進んでいったグループの二つが日本の古代人のルートになっていた。北方のシベリアに進んだ人類の祖先が氷河期に北海道に、またアメリカ大陸に渡った。南に進んだ古代人は東南アジアのズンダランドに到着、長時間の経過ののち、そこから「黒潮の民」となって北上し、琉球から日本の南九州へとやってきたと考えられている。

その中でまず北シベリアから日本にきた人々はバイカル湖のほとりから来た遊牧民ブリヤートの訪問者であった。かれらの痕跡はマリタ遺跡で見出され、そこで出土した細石刃石器が北方領土である樺太から北海道にまで分布して発掘された。それは北シベリアからの訪問者達の残した遺跡が語る原始日本人の足跡であった。東京に住む日本人25人を対象にしての血液検査でDNA鑑定をした結果、17人がこのシベリアからの訪問者と同じ遺伝子を持っていることがわかった。中国からの割合は3人、東南アジアからはフィリピンやタイなどから1人ずつ、残りはその他の地域という結果が出たという。

およそ9,500年前ころ、南からの暖流に乗って沖縄を経て南九州からやって来た人々もいた。鹿児島島の「上の原遺跡」の“黒潮の民”の文化である。彼らは九州の豊かな照葉樹林の森に住み、独

自の文化を発展させ、およそ3,000年間程の繁栄を続けたが、6,300年前ころに起ったキカイカルデラ海底火山の大噴火により埋もれて消滅したといわれる。豊かな森との交流生活から生み出された木材加工のための優れた道具の磨製石器は、四国の太平洋沿いや和歌山県の海岸などの遺跡でも発見され、この民は九州から黒潮海流に乗り日本の他の土地に移住したことがわかる。4,500年前の東京多摩地域に住み着いた縄文人の遺跡からも昭和32年この磨製石器は多数発掘された。

ところでおよそ8,000年前ころ地球は温暖化を始める。日本の森ほど多種類の樹木のあるところは世界中で他にないといわれている。いろいろな木が繁茂し、この森の恵みを受けて7,500年前、北辺の地、青森に500人が住んだ巨大集落があった。1995年、青森県三内丸山の地でこの巨大遺跡が発見されたのである。東京ドーム7個分が入る広大な地域で、32メートルの長さの200人が収容可能な集合建築までであった。しかし今からおよそ6,000年前ころ、突然この集落から人の姿が消えた。理由は地球の寒冷化のためであった。

日本人の祖先はこのころから自然リズムに合わせて生きることを学んだといわれる。森に手を加えすぎると裏切られることを、この寒冷化以来の変化を通じて学んだと思われる。

そして6,000年前ころから稲作の栽培が行われていたことがわかったのは、岡山県の朝寝鼻貝塚古墳でのプラントオパール^①の検証からであった。さらに2,600年前の日本最古の水田跡の遺構が、佐賀県の唐津市菜畑遺跡から発見された。この遺跡によって、縄文人の手による稲作技術がほぼ完成されたと推定されている。

その後今から2,300年ころ渡来人といわれる人々が再び日本にやって来た。彼らは高度な鉄の文化と進んだ稲作技法をもたらした。このころ中国大陸では戦国・春秋の時代であって、何回にも渡り相当の人数の渡来人がイネの文化と鉄製の武器を持って、避難民として新天地を求めて日本にやって来たようである（紀元後300年ころまで）。このときから日本に到達した渡来人と先住民であった縄文人との間で衝突が始まる。渡来人の圧倒的

な鉄製武器の威力の前に縄文人は敗北していった。渡来人の定住地は拡大し、ほぼ日本列島の中ほどの濃尾平野の辺りまで彼らは生活圏をひろげた。しかしそれより東の山岳地帯で深い森に住む縄文人が行く手を阻んだ。東海・北陸・東北地方には古来の森の縄文人が生息していたからであった。深い森に覆われた東日本には渡来人は容易に入らなかったのであろう。そして紀元500年ころの兵庫伊丹市の口酒井遺跡から、これまで出土したことのない北日本の縄文土器（氷式土器）が発見され、北日本の技術者が兵庫県に移動し、交流があったことがわかった。

また青森から九州に運ばれた土器が発見され、関東の神奈川県の中里遺跡には200人以上の住人が共同で稲作を行っていた集落があったことが、発掘された遺跡からわかってきた。この集落に縄文人と弥生人が共働生活をしてきたことも土器の種類^②の多さや残された遺骨から証明された。その後次第に縄文人と弥生人の融和の地域が拡大し、交流がさらに北域まで及んで、現代の日本人が誕生したのであった。

3. 暖かい海が育てた森林の民

以上の経緯について梅原猛は日本の古代以来の歴史的舞台熊野を紹介する「日本の現況 熊野」^①において以下のことを述べている。

日本人は二つの民族から成り立っているということ、一つは土着の旧石器時代の縄文人たちで、彼らは明らかに狩猟採集生活をしている。日本の森にはドングリを实らす木がたくさんある。檜、椎、橡、栗など皆豊かなどんぐりを実らす。そのどんぐりを縄文時代の人たちは主食にしていたであろう。副食として山菜や魚、そしてごくまれには獣を食べていたが、それが長い間の人々の食生活であった。二番目の民族はそうした食生活を根本的に変えた稲作農業を持って大陸から渡来した弥生人たちであった。彼らが平地を開拓し、そこをクニとして、イネを植えた。それによっておそらく生産力は数倍になり人間の生活は安定したであろう。どんぐりに比べて貯蔵がきくからである。

こうして食料は安定し、日本は農業国家となり、弥生時代に（前 300 年～300 年）日本は狩猟採集生活から農業国家に変わったのである。

さらにこの渡来した弥生人が土着の縄文人を征服して作ったクニの歴史が神話となって残ったのだろう。この後は歴史時代の記録によって日本がどのような国家形態と政治を実現したかがわかる。

日本列島の成り立ち以来、私達の住んでいる国がどれほど恵まれたクニかを井上光貞は「日本の歴史 1・中央公論文庫」で、古代史の日本が漢王朝を頂点とする東アジアの秩序の中で、ようやく歴史の表面に現れてきたとき、後漢書の中で「建武中元二年（西暦 57 年）倭奴国 貢を奉じて朝貢す 使人自ら大夫と称す 倭国の極南界なり 光武賜うに印綬を以てす」と記された箇所について解説し、この倭奴国王がどのように扱われたかの古代歴史学的議論の諸見解を紹介した。それによれば、中国は漢王朝の秩序の中で、陸続きの朝鮮半島の諸民族に対して、互いに争わせ、勢力を分断する政策を採った。しかしそれとは異なって、日本にはずっと寛大な態度で扱ったと述べ、「それは日本の歴史の発展にとって、かなり有利な条件であった。古代ばかりのことではない。日本が極東の、しかも海に囲まれた島国であったために、国際的に常に有利な地位を占めてきたことは、日本の全歴史過程の 1 つの特徴である。」⁽²⁾と語っている。

これが古代からの日本の姿であったとして、日本はどのように有利であったのか。これを私は、島国日本のもつ豊かな富をもたらす海流と入り組んだ海岸に囲まれた自然環境の地形から得られる有利さであると思う。

僧鑑真が渡来した際に 5 度の試みでやっと始めて日本に到達した困難さの原因などを思うと、日本とは良くも悪しくも特徴的な位置を占める、命がけでなければ容易に来ることができなかった国なのであろう。見方を変えると、海中に孤立した島国であったがゆえに、文化伝来のための大変な障害にもなり、その結果よその国から見れば、独善的で目に余る振る舞いがなされると見られることもある。

この様な自然の地理的要素を古代以来の我々は安全意識として、無意識のうちにずっと持ち続けてきているのではないか。陸続きの国々の争いの根の深さ、その古代以来の悲惨な歴史を我々は自分の事として理解できないのではないだろうか。歴史的事実としての、国を挙げての困難な体験は 1274 年（文永の役）と 1281 年（弘安の役）の元寇の襲来があげられよう。このときの壱岐や対馬の異国警護番役の壮絶なる戦いの結末はわが国の歴史上あまり例を見ない無残なものであったとおもう。しかしヨーロッパやその他の国々の歴史を垣間見れば、今日においてすら、枚挙に暇のないほど無残な争いの絶えない連続の中で、どれだけ罪もない庶民が犠牲となって来ているかを思い知るのである。それに比してわが国は、外国からの争いが行われにくい地形であった事を認識しないわけにいかない。

こうした自然の環境の条件との関係の中で、人間の営みは特殊な精神行動形態に分けられるとして、それをいくつかの特徴の類型化により解説したのが昭和期初頭の和辻哲郎の発表した「風土論」－人間学的考察－である。

4. 地勢的条件から見た文化・文明的解明と歴史観

昭和のはじめにドイツ留学を体験した和辻哲郎は、当時の外国への渡航の常識として船での何十日にも及ぶ航海旅行を経て、日本からドイツへと国家の派遣学者の任を果たした。このときの見聞体験を基に「風土論」は成立した。個人的意識における時間経過内での体験は、単に個人的なものにおいて終始するのではなく、同時に他人と出会う間柄（世間）の地盤において、共同体を形成する自他の合一の絶対的否定性を経て、自己の外に出る位相の中で自己を取り戻す運動体であるとした。そこで風土の中の他人との出会いの間柄から個人として自己意識は主体的自覚となると共に、自覚的個人の生活の地盤を構成する共同体の意識形成が形態化される。共同体社会が成立するには、そこに住む人々と周りの自然環境とのかかわりが

大切な基盤である。その中で安全に生きる日々の生活の工夫と努力の連続性が織り成され、幾世代の人々の逝き送りの時間があった。そして人間の成長と生活の連続、何世代の積み重ねを経て、歴史や伝統につながるが、そこに緩やかで実感の伴った人々の意識と行動の特殊な思考・行動形式が創出され受け継がれていく。つまり人々が共に生かし、生かさねながら、未来へと超出し、そうした共同体の自己意識において言語の成立、生産の仕方、生産物の流通のあり方、祝い事から弔いの仕方、家屋の作り方や他人との付き合いの仕方といった習慣の中に、各地域独自の特徴をもった客観意識としての文化現象〔歴史〕が現れると考えられた。この意味で個人的意識は間柄（世間）を地盤として抽出され、これをまた否定超越したものとして普遍的民族的な歴史的存在意識といえるものとなる。こう考えるとき、自然の風土とは自分がそこで主体の人間存在を客体化する契機であり、風土現象において自分が外に出ている自分自身を風俗並びに歴史として構成し、また見出すことになる。

つまり和辻にとって風土とは自然そのものであるばかりか、第2には自然の脅威に対峙し、知恵を得、その脅威から逃れるための地域的特殊性を持った工夫と発見と、創造の経験、それを蓄積した民衆の知恵として蓄えてきた成果、文化と伝統を含んでいる。人間の自然との交流を含み、そこで織り成される体験の年輪は、その地域独特の特別の歴史過程であり民族性の文化となることになる。和辻の語るその内容の説得力の重みは、和辻の観察力で整理され、識別される、天才的直観力と表現力のゆえであったと思う。それは観察経験を基礎にした理論化ゆえ、説得力がある。

風土の違いは当然そこに生存してきた人々の自然環境との関係の仕方として、幾通りもの生き方（知恵の堆積）を生み出す。モンスーン地域の気候風土、砂漠地域の気候風土、そして地中海沿岸からアルプスの南側の地域の気候風土、アルプスの北側における牧場的気候風土の地域性に応じた特徴のある歴史的文化伝統が形成される。この特徴ある地域的性格が民族、あるいは国の単位で生

活する人々の習慣行動に影響を与えると和辻は分析している。

地勢的特性が文明に影響を与えるという見方に関しては、梅棹忠夫も同様である。梅棹は人類学者としてアフリカから中央アジアのアフガニスタン、パキスタン、インドなど砂漠地域や山岳地帯、そして300年に及ぶ英国植民地主義の政治支配を経験したインドの地域を学術調査した体験を踏まえて、世界の地域的な特性と生活実態の姿を、有名な英国の歴史家トインビーの西洋史観からみた歴史解釈とは別に、日本人の目で歴史を見なおし、理解する試みを企てた。「わたしが歴史を知りたいと思ったのは、人間の歴史の法則を知りたいからだ。」³⁾と梅棹は言う。この動機からの人類学的文明論構成の試みが「文明の生態史観」で纏められた。梅棹忠夫の「文明の生態史観」は西洋の植民地主義と東洋の民族主義の争う姿を観察研究することから生み出され、実践研究の裏付けによる具体的な理論として発表された。

文明の発展の歴史法則性への関心を持った梅棹は、人間の生活様式の発展が生み出す社会生活様態の特徴を、その一定条件（法則）にしたがって区分できないかと考えた。梅棹によれば、主体と環境の相互作用は、その発展途上で、以前の生存状況は次第に新たな次元に変質していくものであるが、その人間主体と環境との連動的変化の継承法則の特徴をどう捉えるかの観察の視点が問われるといている。

たとえば自然の中で生きる地域社会の社会制度の実態研究が行われる視点に、相続制度を考える。イスラム諸国は中国の社会と同様に均分相続であり、更にインドの実情を現地調査してみるとやはりここも均分相続であった。均分相続とは過酷な状況の下での各個人の生存確保が如何に強いられるかを証明するものである。しかし日本もヨーロッパも伝統的制度としては、長子相続制であった。それは安定した社会における封建制の基礎を築くものだからであり、この共通性は近代化の条件としての特殊地域を形成する特徴であったと梅棹は捉えている⁴⁾。

更にこの近代化成功の条件が、何度かの内発的

な革命の経験であり、それによって国内の古い矛盾は克服され、新たな飛躍の発展が起ったのである。ところが近代化の転換の出来なかった国、例えばインドや中国を例に考えると、日本やヨーロッパの歴史とはまったく別の考え方が必要となる。それらの国には近代化のために乗り越えなくてはならない障害がたくさんあり、それらは日本やヨーロッパにはなかった悪条件なのである。人口過剰、貧困、飢餓、資本の欠如、外国による支配、カースト制、宗教の重圧、非識字や、イスラム教での一夫多妻制度の公認など、どれをとっても長い歴史の中から今日まで尾を引き続ける社会生活の違いから生じてくるものであり、近代化を阻む大変な障害で、とても簡単に自国の力だけで解決の出来るものではないと梅棹は語る。

確かに日本は明治以来無理な近代化を行い、それ故今も前近代的要素を沢山のこしているように思われる。しかし先頭に立って産業革命を成し遂げ近代化を進めたヨーロッパの国や、自力で近代化を実現したわが国の状況を思うと、「日本や西ヨーロッパの特徴は、正に日本や西ヨーロッパの特殊事情であって、決して東洋一般、西洋一般の特徴ではない。西洋の中でも西ヨーロッパだけが、またアジアの中でも日本だけがむしろ特殊な国である」⁶⁾と梅棹はいう。日本はアジア諸国の近代化の手本であると言う考え方があるが、これまで見た経緯からして、事は簡単にそうとは言い切れない。

日本の社会事象は歴史の検証からすると、アジアのほかの国よりもむしろ西ヨーロッパに似ていると考えることが出来る。アジア諸国はそれぞれ特殊性を持つ。しかしとりわけ日本は特殊である。その特殊性は決して近頃始まったようなことではない。数百年前、いやもっと前から日本はアジア諸国とは違った運命をたどっていた。自国内で高度に発達した封建制の下に、庶民文化が花開き、近代化産業の基礎的構築が庶民の中に十分になされていたのである。

こうして生態学的歴史観の立場から人類史を見たとき、古代から2つの異なった性格を持った地域、つまり第1地域と第2地域と呼べるものがあ

ると梅棹はいう。その特徴により、彼は①中世以降の封建時代を経て産業の近代化を体現した第1地域としてのいわゆる近代文明国と、②古代は大帝国を築いたが、今はその姿はなく後進地域となっている第2地域とに分けて考えている。早い時代にすでに見事な古代帝国が成立していた中国やローマ帝国などの繁栄した地域の周辺地域にあった国々を第1地域と考えるのである。

ここで古代文明の成立はほぼ申し合わせたように、砂漠とオアシスの地帯あるいはステップ地帯という乾燥地帯に関係がある。そしてこの地域について「乾燥地帯は悪魔の巣である」⁶⁾と梅棹は表現した。この言葉は、決して生存には適さない乾燥地帯に住む人間集団が、あまりにも激しい破壊行動を行わねばならなかった過去の歴史から生ずる言葉である。遊牧民の生態の調査研究を生態学研究者として実施していった後、こうした激しい人間生存の姿の印象が語られたことに大きな意味があると思う。遊牧民は乾燥した地帯の中から出てきて、嵐のごとく文明の世界を破壊し、吹き抜けていった。文明は癒すことの出来ないほどの難しい打撃をしばしば受ける。その破壊力の主流であり、手本を示したのがこれらの地域で展開された征服の戦いであった。これに続く匈奴、モンゴル、ツングース、イスラムなどの砂漠や乾燥地帯の中から生まれた文明社会も、こうした破壊的暴力の要素を含む集団であった。この地域は歴史地帯であり、この地域が栄えたのは破壊と殺戮、そして征服の暴力をうまく排除した王朝のあった時のみである。常にここに住む者達は新しい暴力に身構えておらねばならず、生産力のおびたしい浪費となった。近世になって初めて中国、ロシア、インド、トルコはいわゆる国民国家として成立するが、かつて帝国の周辺地帯にあった第1地域の近代産業革命に成功した侵略者に今度は立ち向かわねばならなかった。結局この第2地域の国々の革命的な社会状況の展開は全部今日にまで持ち越された。現在も第1地域からの圧力の下に、外からの圧力になんとか対抗しようと努力がなされているのが現実の世界の姿と思われる。

こう見てくると①の第1地域の特徴は、この地

域が極めて自然の恵の豊かな幸運にめぐまれた「暴力の源泉から遠く、破壊から守られて、中緯度温帯の好条件のなかに、温室育ちのように、ぬくぬくと成長する」⁷⁾ 地域にあるからである。中緯度温帯、適度の雨量、土地の生産力の高さ、ある程度の技術力をたくわえていて、幸いなことに②の第2地帯の暴力と破壊の攻撃の嵐からのがれることができた。①の地域は条件の良いところでゆったりと育ち、何回か脱皮し、いまの先進国の立場を得たのである。先進国といわれる国が②の地域にあった古代の大帝国、ローマ帝国や中国の文化の中心から遠く離れて東と西に分かれていたという共通点があることを思えば、梅棹の文明の生態史観は確かに説得力があるといわざるを得ない。

5. 文明の海洋史観

さらに梅棹忠夫の文明の生態史観を手引きとして受け継ぎ発展させ、ヨーロッパと日本の近現代の世界で展開されてきた政治と経済の観点から、歴史を理論付けたのは川勝平太の「文明の海洋史観」である。川勝は中世期のアジアの海での世界規模の貿易事情を研究した立場から、ヨーロッパと日本の経済状況が世界を牽引するに足る素質を持った地域であることを明らかにしている。すなわちアジア海域の経済圏から自国を守るために世界の西と東の辺境の国が、脱出を企て、ヨーロッパは外向きの開放的経済体系を、日本は内向きの封鎖的経済体系を打ち立てたのだという。つまりこの両地域は、アジア物産の継続的な大量の輸入に対価として莫大な貨幣素材・金銀銅などを流失させた歴史を共有した。近世前半期ヨーロッパでは重商主義政策が採られ、日本でも改鑄や金銀銅の流失抑制策が取られた。しかしこの趨勢を根底から変える決め手は無かった。最終的な解決策は、アジア物産の輸入品を自給生産することであった。つまり生産要素（土地、労働、資本）を人間が結合する行為であるが、日本は土地が少なかったが人間は豊富であった。ゆえに勤勉な労働によって少ない土地で生産性を上げ、商品の量産を可能と

した。これに対してヨーロッパは労働が稀少、海外に広大な土地を獲得したため、わずかな労働力での生産性を上げることが求められた。つまり①西洋社会に見る資本集約型・労働節約型生産革命と、②日本の資本節約型・労働集約型生産革命という正反対の形態の異なる2つの対応の産業改革となった。

こうして、ユーラシア大陸の両端で行われた生産革命によって脱アジアが達成され、ヨーロッパはイスラム文明の影響下にある環インド洋イスラム文化世界から自立し、日本は中国文明の海域圏、環東シナ海・南シナ海の海洋中国から自立した。川勝は言う。「経済力は軍事力に勝るとも劣らない威力を持つ。海洋アジアから流入した文物は、日本とヨーロッパに巨額の赤字をもたらした。箱入りの温室育ちの中で近代社会が出現したのではない。経済的外圧に対抗するレスポンスとして生産革命が起こり、国産化＝自給自足が達成され、生産指向の経済社会が出現したのである」⁸⁾と。この自給自足の生産システムを持った経済社会はヨーロッパでの大西洋経済圏と、日本での鎖国という形で19世紀に確立したのである。

さらに彼は明治以来の日本のあり方として、人々がなぜマルクス主義の思想をこれほど真剣に学び受け入れることになったのかという疑問を投げかけた。その答えは、マルクスが近代ヨーロッパ社会を批判するからであったのだが、この点こそが日本人の心にヨーロッパの文明を克服するための地歩を提供するものと思われたからであると受け止めている。しかもこのマルクスの理想はもはや失敗であったことは歴史の現実が示している。事実マルクスの唯物論の根拠となる「物質」概念は物理学の理論を引き出すまでも無く誰が考えても極めてあいまいな不完全なものである。マルクスは哲学、法学、政治学、経済学を研究し、人文・社会・経済の領域を総なめした。生きるために人間が結ぶ経済関係を基盤として押さえ、上部構造に政治・法律の構造を規定し、そうした社会経済構造の反映として人間の意識が構成されるのだという。ゆえに重要なのは下部構造の経済関係の理論であった。つまりマルクスは経済学が上部構造

の人文・社会を規制し、資本主義社会は革命により改革されるべきものであるとした。この議論の向かう要点は経済的人間関係であって、人間の物質的利害以外を考慮しない点が問題であった。人は命をかけて崇高な目標のために自己を犠牲にする心情をも持っている。イエスの示すアガペーの愛があり、日本の伝統的な大衆の心に刻み付けられた、子を思う母の自己犠牲の愛の心と語られるものがあり、失恋の故に自殺してしまう者すらいる。すべてが経済の法則に支配されており、自由な決断を下すことは出来ないなどということは決して無い。つまり経済的・物質的価値以上に大切な価値観があることを人間の精神は知っているのである。

近代の日本人にとって、マルクス主義は西ヨーロッパをトータルに把握できる理論的武器と映ったのであろう。西洋の近代兵器の威力に屈せざるを得なかった明治維新政府が、再起を賭けて西洋に追いつき追い越すために懸命な努力を始めたことと相まって、その後の日本はそれまでのあり方とは異なった国家建設に邁進していった。一連の近代国家実現の改革の結果、貿易工業立国としての地位はある程度実現できた。しかしそれは自然の姿の持つ美しさの喪失ということと引き換えであった。すなわち日本の国の古代から持っていた国土の美しさと日本人の心情の喪失とである。

6. ユーラシア大陸の東西両辺境地の近代国家

その後明治維新により、日本の近代工業国家への道が踏み出されていく。しかしこの近代化社会という資本主義経済の発展はすでに上で述べたように、西洋社会に見る資本集約型・労働節約型生産革命と、日本の資本節約型・労働集約型の生産革命の2通りの違う道である。この点についてももう少し詳しくなせ2通りの近代化かを見ておきたい。この違いをきちんと理解することにより、我々の歩んできた道が理解されよう。マルクスの語る資本の本源の蓄積論とは生産者と生産手段の分離、すなわち肉体労働力以外に何も持たない労働者階

級の成立と、他方生産手段や土地を持った資本家有産階級とが成立することが基本である。しかし日本の近代化の道はヨーロッパとは異なっていた。すなわち明治維新での日本の武士階級は自らその特権を放棄した。このことは西洋の社会との大いなる相違点である。すなわち日本の貴族階級としての武士は、兵農分離で土地を所有していなかったからである。彼らの持っていたものとは統治の資質であり、それはまた経営の精神に通じたものであった。統治の能力が鍛えられ、経世済民の経営の資質が養われていった。江戸時代の上山鷹山や日本の近代国家形成の立役者としての渋沢栄一や五代友厚のような経営者の活躍が語られるゆえんである。西洋と反対に日本では労働者としての農民が生産手段を持ち、経営者としての武士は生活手段を奪われた。西洋では資本家と労働者が、日本では経営者と労働者がそれぞれ分離した。つまり近代国家といってもその中身は大きく異なった社会であったのである。

これからの資本主義形成に求められることは利潤追求こそ自己目的であるという西洋型の土地持ち資本家の理念ではない。むしろ本田技研を創り出した本田宗一郎や、松下幸之助のような経営資質を持った、所有から自由な資本主義社会の形成こそ求められていくものであるのだろう。

こうして達成された日本の近代国家建設の努力は富国強兵、殖産興業、地租改正、教育制度改革、廃藩置県などの方策として宣言され、実行に移されていった。しかしこのとき、西洋視察において日本政府の指導者は大切な人間生活の基本、すなわち自然との調和した生きかたの重要性を見落としてしまったのであった。自然のもたらす豊かさは日本ほどではないとはいえ、日本と比べてヨーロッパの人々が自然を大切にする姿勢には大きな違いがある。目先の利益のためならば自然環境を破壊することなどなんの考慮も払わなくなった現代日本の経済優先利益至上社会とは裏腹に、イギリスの農村の見事なまでののどかさや豊かな環境に示されているように、他のヨーロッパ社会でも都市を一步離れば、いたるところに人間の心を癒してくれる田園風景が展開する。しかし明治の

日本の指導者達はこの点を見落とししてしまった。それからの日本人達は、近代国家＝物質的所有の豊かさと思い込んでしまったまま、今日に至ったのであるが、工業都市の乱立、自然破壊の結果、わが国は人と自然が乖離してしまった。そして自然と共に豊かな人間性を持って生きてきた人々の心は、荒涼たる乱れの中で砂漠化し衰微してきてしまっているのが現状である。

精神の豊かさ、心の穏やかさ、人品の高潔さという価値は、日本ではたとえ物質的にさほど豊かでなかった時代でも、当たり前のように庶民の振る舞いに見受けられたといわれている。ケンペルは日本中が礼節の学校であると江戸初期の日本を述べていた。

また明治期初期には日本の国のいたるところにイギリスの農村に勝るとも劣らない美しい光景があったという。このことを今後の社会の姿としてもう一度考えなおす必要があるだろう。

7. おわりに

これまで見てきたごとく、日本歴史の中で海との関わりはすでに縄文時代からあった。南からの暖かい黒潮の海流が日本の森の文化を育て、この黒潮と北からの親潮の豊かな海流に列島を取り囲まれた世界の3大漁場の一つとしてわが国は、現在も豊かな海の幸を享受している。しかもその海と島は自然の要害として、異国から来る異常な文化や他民族の侵入を防ぎ、そこに住む住民達を守り、実は最も根源的なところで日本を独特の高度資本主義国として発展させる基盤を提供していたのである。

地球規模から見た先進国の地域は、確かに東と西の地域に分かれて出現している。日本と西洋先進国が高度な経済発展を遂げられたのは、以上見てきたように東南アジア海洋経済圏からの自立をめぐる経済事情があった。しかしその自立の仕方は日本の古代からの文明と西洋社会の持つ文明の相違によって、産業改革とその後の社会の在り方の相違として現れている。日本は豊かな自然の恵みを十分に利用して自国の中で産業革命を行った

が、西洋は自然の恵みが薄かったため、その恵みを利用しての自国の中でだけの産業革命の達成は困難であった。そのため外国に自己生存の根拠を見出さざるを得なかった。

歴史における物と人との不可分な関係性を主張したマルクス思想の唯物的観念論が、日本人に大きな影響力を及ぼしたのも、明治維新以来の日本の近代化を急いだ指導的階層の意志の現れであったのだろうが、所詮は日本の風土に合わない思想であることが今日に至って明らかとなっている。すなわち経済的物質的な領域にだけ目を向けた結果、日本の本来の精神的な安定性が崩れ去って、その結果人心の荒廃を引き起こすと共に、豊かさをもたらす自然環境の破壊を引き起こすこととなってしまったと考えられる。つまり文化の輸入において、日本と西洋の歴史的、思想的基盤の背後と共に、自然的文化的な違いを考慮しなくてはならないということである。そして数万年まえの遺伝子に組み込まれた縄文時代以来の日本人の文化の記憶が、穏やかな生活から急激に変化する時代へと激しく変わろうとするとき、最も弱い立場の子供達に混乱のしわ寄せが来て、彼らが犠牲を強いられるのである。この衝撃を大人たちが理解して、どのようにこの時代の流れに対応して乗り越えるかをわれわれは彼らと共に考え、彼らに教え、勇気付けていく必要があるだろう。若者の明日の将来を期待するために、われわれ大人が温故知新の心をもって自国の伝統的文化を継承・伝達し、各人の立場で新たな社会への貢献を体現していくことが切に必要だと思われる。

《注》

- (1) 梅原 猛, 日本の現況 熊野, 新潮社 (とんぼの本), p. 42~43
- (2) 井上光貞, 日本の歴史 I—神話から歴史へ—中公文庫 p. 176~182
- (3) 梅棹忠夫, 文明の生態史観, 中公文庫, p. 118
- (4) 梅棹忠夫, 文明の生態史観, 中公文庫, p. 150
- (5) 梅棹忠夫, 文明の生態史観, 中公文庫, p. 74
- (6) 梅棹忠夫, 文明の生態史観, 中公文庫, p. 124
- (7) 梅棹忠夫, 文明の生態史観, 中公文庫, p. 203
- (8) 川勝平太, 文明の海洋史観, 中央公論新社, p.

参考文献

- 和辻哲郎, 風土—人間学的考察—, 岩波文庫, 1998
梅棹忠夫, 文明の生態史観, 中公文庫, 1998
川勝平太, 文明の海洋史観, 中央公論新社, 1997
井上光貞, 日本の歴史 I—神話から歴史へ—, 中公文庫, 1993
梅原 猛, 日本の原郷 熊野, 新潮社 (とんぼの本), 2003
松原久子, 日本の知恵ヨーロッパの知恵, 三笠書房, 1995
カール・マイヤー, Engelbert Kaempfer. (1651-1716) 東洋奇観エンゲルベルト・ケンペルの旅, 八千代出版, 1989
NHK・スペシャル日本人はるかな旅 第1集~第5集, 2002